

## 巻 頭 言

### これからの工作部門について

工作部門長 松 内 一 雄

法人化になって二年がたちました。われわれ工作部門がどのような方向に向かうのか、厳しい大学の予算の枠内でこれからの姿勢が問われます。

一時、製造業で、「アウトソーシング」ということばが盛んに使われ、人件費を節約するため可能な限り外部に製造を任せるといったことが当たり前のことのように行われました。しかしこれでは技術の中核が外部に依存する形になり、本来その会社の売り物である独自の技術は育ちにくい環境となりました。また、外部に技術が流出し利益が正しく還元されない状況が生まれました。この反省から最近では、「内製の時代」ということばも聞かれるようになってきました。

大学ではなにごとにも独創性が売り物です。ユーザーの依頼は一品生産が多く、他のどこにもない独自の物づくりが生命です。しかも、ユーザーはものづくりに関して深い知識を持っていない場合が多い状況があります。このような特殊性から、ユーザーと加工に携わる技術職員との連携が重要な要素になります。外部に工作を全面的に依存する事は大学には無理があります。

「ものづくり」の重要性が叫ばれています。工作部門の役割なしにものづくりは成立しないと思っています。外部との受け皿としての役割もありますが、独自のものをつくる技術なしにものづくりはありえないと考えます。

いま部門は深刻な問題を持っています。加工技術が売り物の当部門ですが、若手が技術職員として採用される可能性は極めて低く、年々高齢化が進みやがて定年を向かえます。これまでの技術を維持するためには大きな障害です。

このように部門の運営は、将来に向かって大きな問題を含んでいます。これらを少しでも改善すべく将来計画ワーキンググループを立ち上げ、検討に入りました。皆さんの意見を聞き、将来の部門の明るい方向を探っていきたいと思っています。